



本文抜文

「なぜあなたはモテないのか？ それはあなたがキモチワルイからだ／マニュアル本を読む男はなぜモテない／ボンクラは気づく。ノーランの自意識はヤバイ／世界を変えるのは異常な自意識をもって世の中にぶつかってしまうオタクだ」

語って欲しいバンドを語ってくれない音楽雑誌やライターに我々、は反旗をひるがえそう！

これは、神聖かまってちゃん評である。そ、ニートの。。。

音楽の文脈を知っている音楽ライターが書かないから、

20代のks底辺が違った角度から「神聖かまってちゃん」評を紹介します。

今回は、『ダークナイト（クリストファー・ノーラン）』の自意識を軸に、神聖かまってちゃんについて語っていきます。

神聖かまってちゃんとダークナイト（ノーラン）

永遠に戦い続ける魂の物語

果てしなきキモチワルさの果てに

「なぜあなたはモテないのか？
それはあなたがキモチワルイからだ」

著書『すべてはモテるためである』のページを開いて、冒頭にある戦慄の言葉である。

AV監督の二村ヒトシさんがモテについて書いた本だ。文化系ボンクラのモテ本としてバイブルになっている。

女性を落とすには、上手い声のかけ方とは、といった云わいるゴリゴリに女性を口説く方法を書いているモテ本がちまたで多い。しかし、「おれってなんなんだろう？」というようなボンクラの自意識に寄りそった本がなかった。だからこそ二村ヒトシ監督の本は、我々JAPANを読んでいるような、教室の隅っこで独り悶々としている文化系に歓迎された。この本はモテを題材にしているが、それは非常に高い水準で文化系の自意識をあらいだすことに成功している。↓

マニュアル本を読む男はなぜモテないのか、という章では空想の女性を想像して会話形式で書かれている。

「そういうマニュアル本って、一般女性の攻略方法でしょ。まあそれは女性誌もそうだけどさ。せいぜいB型はこう攻めろとか、お嬢さまタイプはこうだろとか、そのて一どの分類でしょ。あたしはどこにいるのよ。あたしを口説きたいんでしょ。しかも本に書いてあると一りのテクニックで、自分の個性すら無いじゃない。恋愛とかセックスとかって、一人ひとりやりかたが微妙にちがってて、それが楽しいのに」「そういう人って、あたしが好きなんじゃなくて、ただ彼女が欲しいだけなんでしょ。でも[ただ彼女が欲しい]なんて、いくら切実でもそんなの無いわよ。女の子でもそういう、とにかく彼女欲しいって言うコいるけど、友達からバカって言われてるわよ。誰でもいいんだったら、それはアソビよ。でもアソビならアソビで[セックスさせて]ってキッパリ言われたほうがわかりやすいし、対処のしようがあるわよ」

たしかに、モテようと最大公約数的に考えてエグザイルを聞いたとして、自分のモテる姿が思い浮かばない。↓

たしかに、モテようと最大公約数的に考えてエグザイルを聞いたとして、自分のモテる姿が思い浮かばない。そもそも、ああいう歌はむずがゆくなって、聞くことができないのである。

それでも無理矢理聴いてみたとして、先ほどのところに書いてある通り、「一般的な女性」ってかなり強引なくくりであるし、一人の女性を思い浮かべて自分がエグザイル聞いてますよとアピールしている姿は、スーパーキモチワルイ。マクロにするのはやめて、それじゃあミクロに絞っていけばいいのか、と考えるとどうやらそれも違う気がする。

全知全能の神でもないかぎり無理。モテようと相手に合わせて自分を変えていこうとしているから、いつまでも答えが見つからないのではないか？だから人と会うたびに一億の選択肢が出てきてしまって、頭をかかえてしまうのではないのか。自分の自意識をきちんと自分で把握することで、相手と自分との距離が分かり、出てくる選択肢が大体5つくらいになるのだ（そう考えると人生ってまさにノベルゲームに見えてきますね）。

あと、自分を分かっていると他人を取捨選択する判断がすぐにつく。だってエグザイル好きって人に出会うと自分のする冷たい態度って客観的に見てあるじゃないですか！で、逆に、自分と通ずるものがある人がすぐに分かってもくる。↓

だってエグザイル好きって人に出会うと自分のする冷たい態度って客観的に見てあるじゃないですか！で、逆に、自分と通ずるものがある人がすぐに分かってもらう。

とくにロックオンジャパン読者は「音楽何好き？」という質問を想定したとき、自分のなかに選択肢が数個見えるはずである。それは自分の中に確固たる自分（=の好きなバンド）があるからだ。好きなものに出会うというのは自分が自分になっていくということなのだ。だから、JAPANをあさって音楽を能動的に受けとろうとしてるぼくらは崇高である。

自意識と対決しているのは日本の文化系だけではない。近年『バットマン』シリーズを監督したクリストファーノーランもその一人である。↓

自意識と対決しているのは日本の文化系だけではない。近年『バットマン』シリーズを監督したクリストファーノーランもその一人である。

自意識とは何なんだろうということを詰め込むとなんだか小難しい映画になってしまうもの。ノーランはバットマンというビッグバジェット映画でそれを盛り込みつつエンタメ作品として一級品を作ることやってのけた。初期の『メメント』の頃からノーランは演出家的なフィルムを撮る監督で、そのトリッキーなモンタージュから、「クリエイターズ・クリエイター」と認識されるのもあって、自意識の葛藤を映像演出の面白さでうまくエンターテインメント作に仕上げている。

しかし、ボンクラは気づく。「ノーランの自意識はやバイ」と。↓

ノーランが監督したバットマンシリーズの二作目『ダークナイト』をしてみる。

クリスチャン・ベール演じるウェイン（バットマン）は両親を幼いころに殺されたトラウマから、悪に対して敏感になった。大人になり肉体を鍛え、大富豪パワーでバットマンスーツを作り、ゴッサムシティで事件が起これば正義感で自身がバットマンとして悪を懲らしめていた。

ウェインはとても人間らしい。好きな人に振り向いてもらえないと、バットマンでいることに心が揺らいでしまうのだ。

そして敵に「お前、ただの自己満足だろ？」と問いかけられる。↓

そして敵に「お前、ただの自己満足だろ？」と問いかけられる。

凶星だった。ウェインは大富豪で資金がある自分が出来ることはこれだ！と思ってバットマンスーツを着て平和のためにと戦っていた。

しかし、よく考えれば億万長者ができることはバットマンスーツで町を監視・パトロールすること以外にあるはずなのだ。わざわざ仮面で顔を隠してまでバットマンスーツを着て、自分自身の肉体で戦うというのは、金持ちお坊ちゃんの超ド変態遊びだったのではないのか、と明かされる。

否定するウェインだが、敵の仕掛けや言葉によってしだいに心の身をはがされていく。↓

否定するウェインだが、敵の仕掛けや言葉によってしだいに心の身をはがされていく。

ノーラン監督のバットマンシリーズを観て、世界のため、人のため、俺の成すべきことはこれなんだ！と迷いなく思える自意識を少しつついてみると、「キミ、それ正義のためじゃなくて自分のためなんじゃないの？」とスケールの小ささに気づいてドキリとしてしまったボンクラは数知れず。

そんなノーランの自意識の問いを入れた『ダークナイト』は大ヒット。公開時は『タイタニック』に次ぐ、全米映画史上二位を記録した。↓

自意識アニメの決定版といえば『新世紀エヴァンゲリオン』である。

監督は『トップをねらえ』の庵野秀明だ。オウム真理教が起こした地下鉄サリン事件のあった九五年にアニメの放映が開始する。

あらすじをざっと要約すると、二〇一五年の日本を舞台に謎の敵が次々と攻めてくるので、一四歳の少年少女しか動かすことができないという謎のロボット「エヴァンゲリオン」でそれを撃退する物語だ。

シリーズ前半はアニメ的「お約束」や、文学、映画、アニメ、特撮といった異常とも思える膨大なパロディを織り込んだ出来すぎたアニメだった。それがシリーズ後半、徐々にシリアスな展開に変わっていく。主人公が戦ったことで友人が傷つき、また違う友人は精神崩壊を起こす。それも絶叫し、苦しみがくさまが描かれる。シリーズ前半でいずれも主人公とコミカルなシーンを演じていた登場人物が、だ。

主人公のシンジは内気な少年で、人とうまくやっていくことが出来ない不器用な人間である。他人の言動や行動に敏感で、いつも人と関わることを恐れていた。過剰な自意識を持っていたのだ。シリーズ前半、いろんな人たちとの関わりの中で、シンジは徐々に他人に心を開き始めるようになる。他人行儀だった言葉がフランクになったり、自分の気持ちを言葉にするようになっていた。それがシリーズ後半、それまでの登場キャラクターたちが徐々にシンジの前からいなくなっていく。ある者は殺され、ある者は廃人になる。彼ら登場キャラクターたちはもうシンジに気持ちよさを提供しない。シンジは「なんでこうなるんだ？」と自問自答し、イラ立ちはじめる。そして再び自分の殻に閉じこもってしまう。

登場キャラクターがいなくなり、心地よさを提供されなくなったシンジがイラついて自問自答するさまは、シリーズ前半のようなコミカルで楽しい展開を期待している視聴者のそれに見て取れる。物語終盤、その自意識はシンジの中だけに収まらず、画面全体、物語全体を侵食していく。ロボットアニメ特有のバトルシーンは無くなり、キャラクターたちは動かず、色塗りもされていない画が画面に映し出され、シンジの自意識が臨界点に達する。もはや、その奥にある監督の庵野秀明の自意識が透けて見えるほどだった。

異常な自意識をもっていることはおかしいことか？ ↓

異常な自意識をもっていることはおかしいことか？ 一般的にみればそういう人はとても生きづらいし、それにぼくも五秒に一回は死にたいと思ってしまう。でも業界の最先端の作品がこうした異常な自意識を提示したものだというのは興味深い。音楽でいうとそれが『神聖かまってちゃん』である。

神聖かまってちゃんの歌詞を読み込んでいくと、の子の自意識が透けて見える。実際にインタビューを読むと歌詞は日記みたいなものだ、との子は言っている。ということは、やはりの子の歌詞には強烈な自意識が宿っているのだ。の子の歌詞を読むと多くの人間がの子の自意識を感じられると思う（共感するかしないかは別として）。

それはの子の描くものが普遍性と大衆性をもっているという事ではないか。超個人的なことを描いてそれが支持されるということはその作家の才能だろう。なので、クリストファーノーランと庵野秀明が自意識を描いて作品をヒットさせたように、の子もそれらの作家級の作品を作れると確信している。世界を変えるのは異常な自意識をもって世の中にぶつかってしまうオタクだ。←

神聖かまってちゃんとダークナイト(クリストファー・ノーラン)

<http://p.booklog.jp/book/82485>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ